

3・11福島原発事故で「原発安全神話」は崩壊した。国策として政治家や官僚が推し進め、産業界が利をかせぎ、御用学者がお墨付きを与える政官財学の巨大利権に抗い、原発安全神話への警告を続けてきた専門家集団がいた。

## 原発神話を衝く京大「熊取六人組」〜小林圭二

ジャーナリスト 西村 秀樹

### 《国会で証言》

東日本大震災から二か月が経過、参議院行政監視委員会が四人の参考人を招いてヒアリングを行った（五月二三日）。トップバッターは、京都大学原子炉実験所の小出裕章助教。いわゆる「熊取六人組」の一人だ。熊取六人組とは誰か。詳細は後で説明するとして、冒頭、小出はこう切り出した。「まず、私自身は原子力に夢をもって、原子力に夢を抱いて、原子力工学科というところに入った人間です」と自らの過去を吐露した。「原発は機械です。機械が時々

故障を起こしたり、事故を起こしたりするのは当たり前のことなわけです。原発を動かすのは人間です。人間は神ではありません。時には誤りも犯します。当たり前のことなわけです。私たちがどんなに事故が起こって欲しくないと願ったところで、破局的事故の可能性は常にもっています」と。

### 《熊取六人組》

和歌山県に程近い大阪府の南部、泉南郡熊取町に京都大学が研究用の原子炉を設置したのは一九六三年のこと。こ

こに「熊取六人組」と呼ばれる原子力の専門家集団がいる。中国の文化大革命で江青女史らを「四人組」と指弾したのをまねて、電力会社から原発推進側が原発に反対する専門家六人をこう揶揄したことに由来する。本人たちは「原子力安全研究グループ」と名乗る。「原子力利用に伴うリスクを研究し、原子力利用の是非を考えるための材料を広く社会に提供する」と目的を述べる。六人のうち、一人は死亡（瀬尾健）、三人が退職（小林圭二、海老沢徹、川野真治）、小出裕章と今中哲二の二人が今も研究を続けている。

私が熊取に取材に出入りするようになって二〇年になる。一九九一年二月、土曜日の午後のこと。私の長男が幼稚園卒業の音楽会に出ているとき、ポケットベルが鳴った。

関西電力美浜原発二号機で、日本で初めて非常用緊急冷却装置が作動する重大事故が起きたとの連絡であった。発電箇所は、加圧水型原発の蒸気発生器（熱交換器）内部にある細管で、ここは加圧水型原発のアクセス鍵と呼ばれ、関西電力は丸ごと新型に交換を決定（これは原発担当記者の私のスクープ）した矢先の事故であった。この蒸気発生器の細管がギロチンでちょん切られたように破断し、高い放射能で汚染された一次冷却水が本来漏れてはいけない二次系へ大量に漏れ出した。この事故は、当時、日本国内で最悪のレベル二の事故で、私は関西電力の記者会見に耳を

傾けると共に、原発に批判的な専門家集団がいる熊取に足繁く通った。

六人組の一人で、蒸気発生器細管など固体物性に詳しい川野真治にずいぶん詳しく教えてもらい、ニュース報道に反映させることができた。川野は一九四二年生まれ。助教となつたのち退職した（二〇〇二年）。

美浜事故の四年後、今度は美浜町の東隣り福井県敦賀市白木に高速増殖炉もんじゅが運転を始めるので、私は一時間のドキュメンタリー番組制作を決め、熊取六人組の一人で高速増殖炉研究者、小林圭二を知恵袋として取材した。

もんじゅ周辺に住む住民が原告となつて、一九八五年、国に対し設置許可の無効確認と、当時の動燃（動力炉・核燃料開発事業団、のち日本原子力研究開発機構）に建設と運転の差し止めを求める裁判を起こし、二審の名古屋高裁金沢支部は画期的な住民勝訴判決を下す。その原動力となつたのが小林圭二だ。小林の経歴を振り返る。

### 《旧満州生まれ》

小林圭二は一九三九年五月、大日本帝国の傀儡国家満州国の大連で生まれた。父は京都帝大医学部を卒業後、当時、東洋一の病院と言われた満鉄（満州鉄道）病院に勤務する

小児科医師。

大連は中国東北部、遼東半島に突き出た港町。日清戦争後はロシア、そして日露戦争後は日本の租借地となった。詩人清岡卓行の芥川賞作品『アカシアの大連』の舞台で、小林によれば「神戸中に洋館建てを並べたようなきれいな町」。当時、この町には日本人がおよそ一〇万人、最盛期には二〇万人も住んでいたという。租界ではそこに出入りする中国人を含めほとんど日本語で用が足りた。

大連にアメリカ軍は空襲をしなかったが、小林が海水浴に行くとき、沖合に突然、アメリカ軍の潜水艦が目の前でぐわっと浮上したことを直接体験した。港は包囲されているとの警告であったろう。一九四五年夏、敗戦の日のことはよく覚えている。六歳、家族と共に緊張してラジオの前に座り耳を傾けた記憶が鮮明だ。多くの日本人がそうであったように、ましてや幼少で内容を正確に把握できなかったが、それでも尋常ではないことが起きたと身を固くしたという。

敗戦後、小児科医の一家は大連に残った。やがて国共内戦に中国共産党が勝利を収め中華人民共和国が成立した（一九四九年）。新中国は特殊技術を担う日本人専門家に厚遇で新中国建設に協力を求め、小林一家は大連滞在を決めた。旧満州鉄道の土木建設技師や医者など、結構多くの日本人が大連に残った。一九五〇年六月朝鮮戦争が勃発、中

朝国境に程近い大連上空にも戦闘機が飛び交い、旧満鉄の日本人関係者は特別仕立ての列車で北京に疎開した。

小林圭二少年の北京暮らしが始まった。父は北京で医者を開業、中国共産党中央委員会の機関紙『人民日報』や北京で発行されている日本語新聞『民主新聞』を食い入るように読んだ。この『民主新聞』を発行していたのは、大塚有章<sup>ゆうしょう</sup>で、マルクス経済学者河上肇の義弟。戦前の日本共産党員で赤色銀行ギャンブル事件の実行責任者。満期釈放後、甘糟大尉が経営する満州映画で働き、戦後は日中友好運動に尽力する経歴の持ち主だ。

小林圭二は『民主新聞』が南京大虐殺や七三一部隊、さらにアメリカ軍によるヒロシマ・ナガサキ原爆被害の実態を伝えていたので、むさぼるように隅から隅まで読んだという。思春期にこうした戦争の負の遺産を心に刻んだことは、やがて工学部に進学する一方で社会に関心をもつ、大きな動機となった。

### 《引き揚げ、原子力研究へ》

アメリカと北朝鮮の間で朝鮮戦争の休戦協定が結ばれ東アジアで銃声の音がしぼし止んだ（一九五三年）。小林一家は北京郊外の天津港から船に乗り、日本の埼玉県にあ

る父親の実家に引き揚げた。小林圭二少年にとって初めての日本体験である。北京で読んだ日本語新聞で喚起された社会問題への深い関心は、高校時代にも続き、アメリカ軍立川基地の拡張工事をめぐる砂川闘争に参加する。「おかげで大学進学に一年浪人してしまいました」と小林は苦笑した。

「埼玉から東京は近すぎるから。もう一つは京都の落ち着いた町並みが好きだったから」との理由で、選んだ大学は京都大学工学部原子核工学科であった。原子核エネルギーの工学的利用を研究するこの学科は、一九五八年設立の京都大学が日本で初、一九六〇年東京大学に工学部原子力学科が誕生する。「なぜ原子核工学を選んだのですか」との問いに、「原子力は夢のエネルギーでしたからね」と小林は答えた。

京大時代、時あたかも六〇年安保の時代、小林は「私にとって決定的な体験であった」と回顧する。

## 《鉄腕アトムとゴジラ》

小林が日本に引き揚げた翌年の一九五四年は、世界中の原子力開発にとってターニングポイントとなった年だ。

朝鮮戦争で国連軍の司令官マッカーサーは原子爆弾の使用を求め、トルーマン米大統領から罷免され日本を去る（一

九五一年）。朝鮮戦争の休戦後、アイゼンハワー米大統領は国連総会で「アトムズ・フォー・ピース」演説を行い、原子力の平和利用を推進する方針を打ち出した（一九五三年一月）。背景には、軍需産業の平和産業への転換促進によって雇用の確保や軍需産業の延命などを目的としたと言われている。五四年ソ連が商業用としては初の原子力発電所を稼働させた。米ソ冷戦下、アメリカがビキニ環礁で水爆実験を行いマグロ漁船第五福竜丸が死の灰を浴び（一九五四年三月一日）、機関長の久保山愛吉が死亡した。

日本国内では改進黨の代議士中曽根康弘が原子力開発予算、二億三五〇〇万円を含む予算案を提案し、当時の左派社会党も賛成し日本の原子力開発がスタートしたのも同年。のちに中曽根は「予算額は燃えるウラン二三五から取った」、「学者がボヤボヤしているから札束で学者のホッペタをたたいて目を覚まさせるのだ」との証言が伝わる。

正力松太郎読売新聞社主が初代の原子力委員会の委員長のちに初代の科学技術庁長官に就任。新聞も原発推進に大きな役割を果たした。

大衆文化の世界では、ビキニ水爆実験で第五福竜丸が被爆した年、東宝映画は映画『ゴジラ』を創り大ヒットした。ゴジラは放射能で巨大化したバケモノだ。一方、手塚治虫の『鉄腕アトム』（一九五一年掲載開始）は百万馬力の原子

力ボーイで正義の味方であった。

ヒロシマ・ナガサキ原爆の悲劇は占領下、アメリカ軍の報道検閲によつて日本国内でほとんど報道されなかつた。『アサヒグラフ』がヒロシマ原爆の惨状を初めて取り上げたのは一九五二年八月六日で、日本の主権回復後だ。当時、日本国内で被爆者は差別され、被団協・日本原水爆被害者団体協議会の結成が一九五六年八月。広島中国新聞が『ヒロシマの原爆』で被爆者問題を本格的に取り上げたのは、実に敗戦後二〇年経つた一九六六年のことであつた。

小林圭二は北京で『民主新聞』を読み原爆の悲惨な被害をよく知つていた。その小林は京都大学工学部原子核工学科を卒業後、熊取の原子炉実験所に就職する。

### 《初の住民訴訟・伊方原発訴訟》

一九七〇年、大阪・千里丘陵で開かれた大阪万博で、原子力の火が初めて灯つた。商業用原子炉として西日本初の日本原電敦賀一号機が電気を大阪万博に送つた。一九五〇年代、六〇年代、エネルギー小国日本は原子力を夢の科学技術と期待した。

学生時代六〇年安保闘争を経験した小林圭二は、熊取で働く一方で、社会科学に関心のある京大理科系の仲間と「現

代思想研究会」を始める。読書会などを開き、中国の文化大革命をどう見るのか、さらに研究者はどうあるべきか、幅広く議論した。一九六〇年代後半、全共闘運動が小林ら原子力の研究者たちに「専門バカになるな」と自己否定を求めた。同時代、チツソが引き起こした水俣病を石牟礼道子が『苦海浄土』刊行で告発（一九六九年）、一株主運動による異議申し立てが公害企業チツソを揺さぶつた。

そんな折、愛媛県伊方町に四国電力が初の伊方原子力発電所一号機の建設を計画、地元住民の反対を京都大学の学生が現地で聞きつけた。裁判所に訴え、何としても原発建設を阻止したいと住民は、関西の原子力専門家たちに伝えてきた。訴える相手は、原発推進を国是とする日本政府と電力会社。だから住民側も理論武装が必要となる。

はじめ窓口になつたのは、久米三四郎である。久米は小林の一三歳年上、大阪大学の理学部化学科の講師だ。久米の住民をサポートしたいとの思いは、まず久米の共同研究者で京都大学原子炉実験所に勤務する海老沢徹に届き、さらに小林に伝わつた。海老沢は、小林と同じ一九三九年生まれ、のちに助教授になつてゐる。

熊取に勤務する海老沢徹、小林圭二に、同じ職場の瀬尾健、川野真治らが加わり、「現代思想研究会」が中心になつて、伊方の住民を支援する研究者グループができあがる。

裁判がはじまる七〇年代半ばには、小出裕章と今中哲二が加わり、やがて「熊取六人組」と名付けられた。

住民側の訴訟代理人には、大阪弁護士会所属の藤田一良かずよしらが決まる。藤田は手弁当で苦勞した。

### 《スコア一〇対一のぼろ勝ちのはずが》

一九七三年八月、伊方原発設置許可取り消し訴訟が四国の松山地裁で始まった。住民側は、総理大臣を被告に、原子炉設置許可の取り消しを求め、原発のすべての問題点を争点とした。原発建設の是非をめぐって、周辺住民が事業者を訴える裁判は日本で初めて、世界でも例がなかった。

「なぜ裁判への協力を引き受けたんですか」との問いに小林は「伊方原発の建設予定地での四国電力のやり方が、地元のア媛県庁と一体になった強引なもので、その攻め方が余りにひどかったから」という。産業界と行政が一体となつて原発を押し進めるやり方は、やがて日本中の原発建設予定地どこでも姿を現す。小林によれば、「住民側証人が争点を追及すると国側証人はきちんと反論できない、沈黙をせざるを得ない、ぼろぼろだった。これでは原子炉の設置の審査をまともにやっていないこと、いかに原発審査がいい加減か、誰の目にも明らかになつた」という。

「このときの法廷はね。ちょうど阪神タイガースが三番バース、四番掛布、五番岡田がクリンナップを打つていた、そのころの阪神対巨人戦のようでしたね。スコアは一〇対一で圧倒的な勝利」。これは阪神びいきの小林の表現。論点は、のちに福島第一原発で世界中の知るところとなつた炉心溶融の問題、つまり軽水炉の電源がすべて喪失すればウラン燃料がメルトダウンを起す恐れがあることと、活断層の問題であつた。

まだ地震学者石橋克彦（現・神戸大名誉教授）が「原発震災」という言葉で地震による原発事故の危険性を告発する前ではあつたが、伊方原発の建設地点が、紀伊半島から四国山地を経て佐多岬から九州の大分県に抜ける中央構造線のすぐ北側に位置し、「活断層が動けば、伊方原発の原子炉の耐震設計では耐えられない」と住民側は主張した。

3・11（二〇一一年）の後、巨大地震はプレートテクトクス理論といつて大陸が移動するためで、東日本大震災は太平洋プレートと北アメリカプレートがせめぎあつた結果だと世界中の人が知つた。しかしまだ活断層学説が日本国内の地震学者の間で主流派になつていない一九七〇年代半ばでの論争だ。裁判で国側証人の気象庁地震課長は「断層は地震の化石である」と活断層学説に否定的な見解を述べた。現在の地震学の学問的知見から見ればお笑い草の迷

(?) 文句だが、伊方原発訴訟を裁く判事は国側証人の肩書きを重視した。地震学が大きく変わる前の理論に基づいて地震国日本の原子炉立地審査指針が作成されたところに、日本の原発の悲劇がある。

伊方原発訴訟は審理で住民側が有利に進んだにもかかわらず、判決直前になって裁判長が三人目に替わり、結局、判決は無惨な住民敗訴であった(七八年四月。控訴審、最高裁も住民敗訴)。

### 《もんじゅ裁判で勝訴》

伊方原発訴訟提訴から一二年後、今度は動燃が福井敦賀市に建設予定の高速増殖炉もんじゅをめぐる、周辺住民が訴訟を決め、理論的な後ろ盾を小林に求めた。一九八五年に提訴したものの、はじめ原告適格性という入り口論議で時間ばかりを費やしたが、提訴から七年後、最高裁が全員の原告適格性を認め、ようやく実質的な審理に入った。

差し戻し審の福井地裁で住民側は破れたが、二〇〇三年一月、控訴審の名古屋高裁金沢支部は住民勝訴の画期的な判決を下した。小林がほとんどすべての論点で書証を執筆しての勝訴判決だけに小林の喜びもひとしおであった。

実はもんじゅが臨界(核分裂反応が連続的におきること

を「臨界」という。一九九五年五月)してわずか七か月後、冷却材の液体ナトリウムが配管から漏れだし燃えだす事故が起きた(九五年一二月)。

この事故を受け、高裁は住民勝訴の判決を下したが、実際に事故が起きる前から、小林は高速増殖炉もんじゅの数々の問題点を書証に書いた。原子炉の構造が軽水炉と違って暴走しやすいこと、冷却材の液体ナトリウムが水と反応すると爆発的な反応を起こすため蒸気発生器に構造的な問題があることなどを書証で指摘した。

高速増殖炉の燃料プルトニウムは半減期が二万四千年と長く発がん性があり危険、またプルトニウムが核兵器の材料になるため、日本の核武装の危険性を厳しく指摘した。

画期的な住民勝訴の控訴審判決から二年後、最高裁は「側に違法性はない」と住民逆転敗訴の判決を下した。小林は「ちやぶ台返しだ」と怒った。原発には、国と産業界、それに御用学者という産官学のトライアングルが強固だが、住民にとって最後の砦である司法は、原発廃絶にとって大きな壁となって立ちほだかっている。

### 《原発の歴史は事故の歴史》

原発の歴史は、同時に事故の歴史でもある。そもそも原

子核エネルギー開発は一九三九年、ウラン核分裂反応の発見に始まる。核分裂反応はわずかな量で膨大なエネルギーが放出される。ドイツ出身の亡命ユダヤ人たちはナチスドイツが原子爆弾を作ることを恐れた。亡命ユダヤ人たちはアメリカのルーズベルト大統領に信書を送り、一九四二年、アメリカは原子力爆弾を製造するマンハッタン計画を決定、膨大な国家予算と多数の学者をつぎ込んだ。三年後、アメリカのニューメキシコ州で、人類初の原子爆弾が爆発（一九四五年七月一六日）。すでにナチスドイツは降伏、アメリカは、八月六日に広島、八月九日に長崎に相次いで原子爆弾を爆発させ、合わせて二一万人を超す人びとが亡くなった。すでに日本は戦争能力を失っていたが、アメリカ軍上層部はマンハッタン計画の膨大な出費を正当化するため原爆投下を決めたと研究者は指摘する。

第二次大戦後、ソ連が一九四九年原爆実験、アメリカの核独占は崩れた。先述のように朝鮮戦争で原爆使用の危機があったが、アイゼンハワー大統領の演説をきっかけに原子力発電の開発が始まる。一九五五年、アメリカで世界初の原子力発電を行った高速増殖炉EBR-1炉が炉心溶融事故を起こした。一九六六年、高速増殖炉エンリコ・フェルミ炉が炉心溶融事故を起こし、アメリカは高速増殖炉開発から撤退する。放射能との闘いは容易ではない。

### 《スリーマイルアイランド原発事故》

一九七九年三月、原発事故を描いたハリウッド映画『チャイナ・シンドローム』が全米で公開された。そのわずか二日後に起きたのがスリーマイルアイランド原発事故だ（以下、TMI事故）。アメリカの東北部ペンシルバニア州の州都郊外にある原発で冷却材の水がなくなり、原子炉が空焚き状態となつて燃料棒が溶け出す炉心溶融が起きた。メルトダウンという言葉が世界中で有名になった。

TMI事故が発生し映画は全米で大ヒット。TMI事故以来、アメリカでは原子力発電所は新たに建設されていない。熊取では小林の一年年下の瀬尾健が、TMI原発事故での放出放射線を推定する仕事に取り組んだ。瀬尾健は一九四〇年生まれ。ただし大学卒業時は小林圭二と同じ学年であったという。瀬尾はアメリカ原子力規制委員会（NRC）や電力会社が公表するごく限られたデータに基づいて、事故原発から周辺環境に流出した気体状放射性物質の量を緻密に推定していった。瀬尾の推定結果は、NRCが公表した値に比べ、ケタが二ケタほど多い量だった。この瀬尾の推定値はアメリカ国内で高く評価され、五年後、ペンシルバニアで開かれた周辺住民の放射線被曝検討会議に



国外からの報告者として招待され講演を行った。

熊取六人組が活躍する舞台が世界に広がって行った。

## 《チェルノブイリ原発事故》

原発史上、最悪の事故が、チェルノブイリ事故だ。熊取では、熊取六人組の最年少今中哲二（といつても今年六〇歳の還暦を迎えるが）が研究対象とする。

チェルノブイリ事故は、今からちょうど二五年前ソ連現在のウクライナ共和国）にあるチェルノブリ原発で炉心溶解（メルトダウン）がおき原子炉が爆発、周囲の住民が強制的に避難を余儀なくされた事故だ（一九八六年四月）。二五年経った今でも半径三〇キロ圏内は立ち入り禁止区域だ。今中は、一九五〇年九月広島市生まれ。母親は爆心地三・五キロで被爆し、今中はいわば被爆二世。高校卒業前年、全共闘運動のおおりで東京大学が入学試験を実施せず（一九六九年）、今中は大阪大学工学部原子力工学科に進む。東京工業大学大学院の修士過程を修了後、京都大学原子炉実験所に助手として採用された（一九七六年）。熊取に勤務して三年後、アメリカでTMI事故が、一〇年後、ソ連でチェルノブイリ原発事故が起きた。

チェルノブイリ事故から三年後、ソ連国内の政治状況が

少しずつ変化した。今中がベラルーシ共和国の首都ミンスクにある科学アカデミーと、また瀬尾健がモスクワのクルチャトフ研究所と交渉を始めた。翌年夏（一九九〇年）、二人はようやく一か月間、現地を訪問することができた。以来、今中は合計三〇回ほど、海外を訪問している。

瀬尾は肺ガンで一九九四年、亡くなる。余命三か月とガン宣告され瀬尾には時間がなかった。瀬尾が亡くなった翌年、原発事故をシミュレートした瀬尾の著書『原発事故・その時あなたは』の出版記念を兼ねて、京都で「瀬尾健を偲ぶ集い」が開かれ、私も参加した。瀬尾が亡くなる直前まで病床で原稿の推敲を重ねていたとの証言に、参加者は原発の危険性を訴える瀬尾の強靱な精神に胸を熱くした。

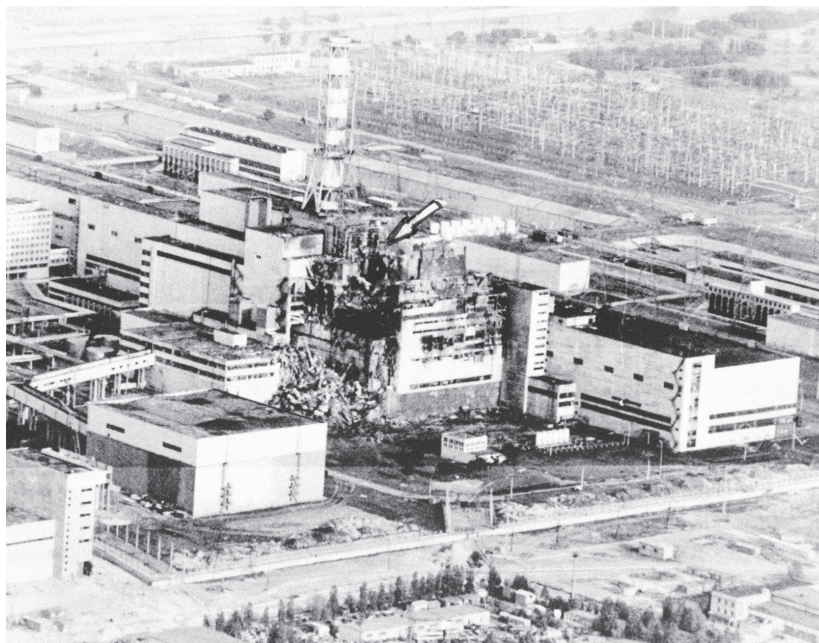
チェルノブイリ事故をめぐって、原発推進の立場をとる国際原子力機関（IAEA）は事故後四か月で報告をまとめた。それによると、急性放射性障害で死亡した運転員・消防士三三人の他、四〇〇〇人が晩発性ガンを発症し死に至ると推計した。一方、今中の推計はこうだ。「筆者としては全世界で二万から六万人というのがチェルノブイリ事故によるガン死見積もりとして妥当なところかと考えている。チェルノブイリ事故による被害について指摘しておきたいのは、放射線被曝を直接の原因としない『間接的な死者』についてである。田舎暮らしをしてきた老人が、突然

に都会に避難させられアパート暮らしを余儀なくされたなら『どんなに健康に悪いか』容易に想像されよう。また、移住によって職を失い、『アル中になって病気になる』例も数多いことだろう。こうした健康影響は、もちろん被曝影響ではないが、チェルノブイリ事故の影響であることは確かである。チェルノブイリ事故が人々にもたらした災厄全体を議論しようとするなら、こうした『間接的影響』を無視することはできない」と。

原発の工学的な影響以外に、人びとの暮らしに目を向けるところが今中の優しさの表れだ。

### 《フクシマ原発事故》

3・11(二〇一一年)東日本大震災が発生、東京電力福島第一原発ではブラックアウト(全電源喪失のこと)。地震により送電線が倒壊し外部電源が喪失、一時間後今度は津波で非常用電源やバッテリーが喪失)。その結果、一号機から三号機までメルトダウン(炉心溶融)、さらにメルトスルーといって溶融したウラン燃料が原子炉压力容器の底から漏れ出した。はじめ原発の専門家は誰もがTMI事故の再来を懸念した。熊取六人組が四国電力伊方原発訴訟で警告した電源喪失からウラン燃料の溶融に至る過酷事故が目の



「熊取六人組」は史上最悪のチェルノブイリ原発事故から多くを学んだ。福島も同じレベルの惨事Ⅱ中央が爆発した四号炉、一九八六年五月。タスⅡ共同

前で、日本で起きたのだ。

しかしフクシマの原発事故はTMIのレベルに留まらなかった。フクシマではメルトダウンで水素が大量に発生し格納容器にたまり、ついには水素爆発を起こし、原子炉建屋が爆発で吹き飛んだ。これで大量の放射性物質が外部に放出されフクシマ原発事故は新たなステージに入り、チェルノブイリ事故との比較が必要になった。フクシマ原発の周辺住民は、チェルノブイリ事故後の経過を大いに参考にせざるを得なくなった。日本政府はフクシマ原発で外部に放出された放射性物質の量はレベル七（チェルノブイリ事故と同じレベル）と発表した。

フクシマ原発事故からちょうど一週間後（三月一八日）、熊取の京都大学原子炉実験所のゼミナール室は入りきらなほほど大勢の記者や原発の行く末を心配する市民で埋まった。3・11以前から、今中が長年のチェルノブイリ事故調査結果を発表するために「原子力安全ゼミ」を一八日に設定していた。ところが、急遽テーマが「福島原発で何が起きたか」に変更された。

## 《ヒロシマ原爆八〇発分》

熊取のゼミ室でフクシマ原発事故を報告したのが「熊取

六人組」の一人、小出裕章だ。小出は一九四九年八月、東京の下町、台東区上野に生まれた。中高一貫の私立学校を経て、「東京が嫌いだったから」との理由で東北大学工学部原子核工学科に進学する。二二歳学生時代、宮城県女川町むねがわに東北電力が建設予定の原子力発電所の反対運動を知り、女川町での第一回原発反対集会に参加し、以来、原子力に對する考えを一八〇度転換したという。東北大学大学院を修了後、京都大学の原子炉実験所に助手として採用され、以来ずっと助手（現在は名称変更で助教という）。

小出は電力会社の新規の原発建設予定地で数多く講演を重ねてきたためか、小出の講演はわかりやすい。3・11の後、こんな数字を話す。「フクシマ原発事故で外部に放出された放射性物質の量はヒロシマ原爆の八〇発分だ」。説明はこうだ。「ヒロシマで核爆発したウランの量はおよそ一キロ。一方一〇〇万キロワットの原発が一年間稼働して貯まる放射性物質の量は一〇〇〇キロ。チェルノブイリ原発事故での放出量はセシウム一三七で換算してヒロシマの八〇〇発分。日本政府は、フクシマがチェルノブイリ事故の一割と発表したから、結局ヒロシマ原爆八〇発分がフクシマ原発から周辺に放出された勘定になる」と。

この数字を聞くと、フクシマ原発事故直後、原発推進国のフランス政府が在日フランス人に対し、せめて東京以西

への避難を勧告したり、同じ原発推進国のアメリカ政府が在日アメリカ人に対しフクシマから八〇キロ圏内の立ち入り規制を求めたことも理解ができる。

小出にフクシマ原発事故の感想を聞いた。「電力会社や通商産業省ら推進側は、本当に過酷事故が起きる危険性を想定していません。例えば、ベント作業が典型的です。三月一日夕方、メルトダウンの危機にあり東京電力は圧力容器に注水しようにも、焼け石に水状態で内部の気圧が急激に高まり注水できません。このため、ベントと違って安全弁から気体を抜いて圧力を下げようと試み、総理大臣もベントをしると命令するため現地に行ったほどです。その安全弁すら、過酷事故対策として、アメリカの原子力規制委員会から安全弁を設置するように再三勧告され、日本の電力会社は断った末、いやいや設置した経過があります。

結局、フクシマではその安全弁によるベント作業が唯一の命綱となりました。私は電力会社が安全弁を設置するとき、放射能を外部に漏れないように安全弁にはフィルターを付けるものだと思っていました。ところが安全弁にフィルターがなく、外部に放射性物質が漏れることを防止できませんでした。この一例をとっても、原子力の推進側はともに過酷事故のことを考えてこなかった証左です」と原発安全神話が崩壊した具体例を挙げた。



『現代の理論』バックナンバー案内

定価1,000円(送料込)  
注文は明石書店まで

10月号特集「Vol.24」  
特集 菅新政権の戦略はこれだ

対談 菅政権は「最後の希望政権」か	早野 透
政権交代をなぜ生かせなかったのか	橋川俊忠
菅新政権―四つの制約と突破力	山口二郎
民主党政権の指導力を問い直す	住沢博紀
失敗重ねた米戦略への追従をやめよ	高安健将
増税による新たな成長の可能性	金子敦郎
金融の視点から日本の財政赤字を考える	小野 一
東アジアの時代、北九州がおもしろい	山川 修
「最小不幸社会」の雇用・年金戦略	上川孝夫
地方分権の現在にはらむもの	叶 芳和
何のための派遣法改正？	小林良暢
小特集●東アジア共同体をどう構築するか	秋野純一
東アジア共同体と民主党外交	東海林智
アジアの経済統合と「共同体」論	進藤榮一
国家戦略で欧米への排出権流出を防げ	平川 均
シリーズ抗う人②	大塚俊和
大逆事件の志を継ぐ―二河通夫	西村秀樹
連載●教育再生への道を探る	尾木直樹
「こどもの危機」の現状と打開への視座	大谷和雄
現場に任せろ！	

東京電力は今度の事故を想定外だと逃げるが、なぜ津波に襲われた女川原発は炉心溶融に至らなかったのか。今度の事故は東京電力の人災ではないのか。東京電力は説得力ある説明が必要だ。

### 《誰がどう決める原発政策》

3・11フクシマ原発事故で「原発の安全神話」は崩壊した。イタリアでは原発の是非をめぐって国民投票の結果、九割の反対で脱原発、スイス、ドイツも脱原発が進む。一方、ベトナムや中国は原発推進の方針を進める。

日本に国民投票制度が法律上定められていない中、誰がどうやって原発政策を決めるのか。「原発軍国主義」という言葉がはやっている。いったん決めた国是を修正することは日本の官僚や政治システムでは困難で、まるで敗色濃厚でも戦争を止められなかった戦前の日本と酷似していると指摘だ。原発推進を国是とするフランスと日本は共に、官僚制度が強い政治形態だ。アメリカはアイゼンハワー大統領が危惧したとおり産軍複合体が経済全体に大きな割合を占める。原発産業の多くは軍需産業からの転換組。日本の原発一基およそ四〇〇億円、一九七〇年以来五四基の原発が完成した。費用は地域独占の電力料金と電源三法に

よる税金。官僚や政治家が国策の名の許に原発を押し進め、産業界が巨額な利をかせぎ、御用学者がお墨付きを与える。民主党最大の支持母体・連合は原発プラントメーカーの労働組合や電力労連が主流派を形成し、原発容認派だ。結局、原発とは巨大利権の塊なのだ。

フクシマ原発事故は、いったん事故が発生すると数時間で制御が困難になることを示した。チェルノブイリの三〇キロ圏や福島県の飯館村が一例だが、大量の放射性物質がいったん原子炉から外部に放出されると相当数の周辺住民が避難を余儀なくされ住民はストレスに襲われる。

フクシマ原発事故からちようど三か月（六月一〇日）、福島県相馬市の酪農農民が自殺した。原発事故で四〇頭の牛を手放した。牛舎の壁に「原発さえなければ」「原発で手足ちぎられ酪農家」との書き置きがあった。

生命と便利さをハカリにかけるわけにはいかない。

推進側は容易に巨大利権を手放さない。反原発側と推進側の闘いはこれから本番だ。原発をどうするのか。

原発の実態をよく知る熊取六人組の経験と叡智が、今こそ求められている。

にしむら・ひろみ

一九五一年生まれ。ジャーナリスト。著書に「天阪で闘った朝鮮戦争」「北朝鮮抑留」(共に岩波書店)など。